

**四頭の獣の幻 (ダニエル書 7章) : 神の視点から見た姿** → 歴史の最終段階における審判が描かれているバビロンの王ベルシャツアルの治世元年 (BC553) のことである※1。ダニエルは、眠っているとき頭に幻が浮かび、一つの夢を見た。彼はその夢を記録することにし、次のように書き起こした。

ある夜、わたしは幻を見た。見よ、天の四方から風が起こって、大海※2を波立たせた。すると、その海から**四頭の大きな獣**が現れた。それぞれ形が異なり、

▶ **第一のものは獅子**のようであったが、**鷲の翼**が生えていた。見ていると、翼は引き抜かれ、地面から起き上がらされて人間のようにその足で立ち、人間の心が与えられた。  
**第一の獣 : パピロニア帝国(BC605-539)** →



▶ **第二の獣は熊**のようで、横ざまに寝て、**三本の肋骨** (→リディア BC547、パピロニア帝国 BC539、エジプト BC525※3) を口にくわえていた。これに向かって、「立て、多くの肉を食らえ」※4 という声をした。

「強い者が帝国を支配せよ。」と後継者を決めなかったアレクサンドロス大王が急逝(BC323)後、配下の将軍たちが大王の後継者の座を巡り、ディアドコイ戦争が勃発、4つの国に分裂する。→→→→  
 ①マケドニアのカッサンドロス朝  
 ②シリアのセレウコス朝  
 ③エジプトのプトレマイオス朝  
 ④小アジアのリュシマコス朝

← **第二の獣 : メディア・ペルシア(BC539-331)**

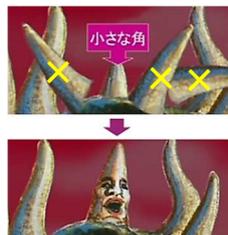


▶ **次に見えたのはまた別の獣**で、**豹**のようであった。背には鳥の翼が四つあり、頭も四つあって、権力がこの獣に与えられた。  
**第三の獣 : ギリシア王国(BC331-168)** →



▶ この夜の幻で更に続けて見たものは、**第四の獣**で、ものすごく、恐ろしく、非常に強く、巨大な**鉄の歯**を持ち、食らい、かみ砕き、残りを足で踏みにじった。**他の獣と異なって、これには十本の角** (→分裂諸国) **があった**。その角を眺めていると、もう一本の**小さな角**※5が生えてきて、先の角のうち**三本**はそのために引き抜かれてしまった。この小さな角には人間のように目があり、また、口もあって尊大なことを語っていた。(ダニエル書 7 : 1~8)

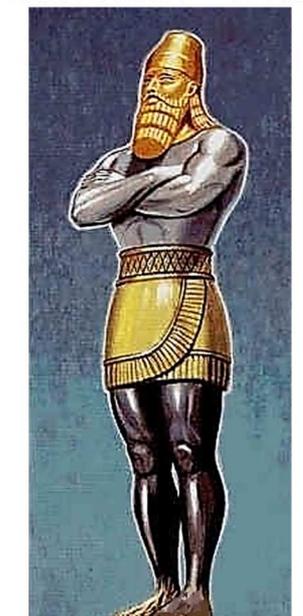
← **第四の獣 : ローマ帝国**



\*\*\*\*\*

**巨大な像の正夢 (ダニエル書 2章) : 人間の視点から見た姿 ⇔ 神の視点から見た姿 : 四頭の獣の幻 (ダニエル書 7章)**

部位	材料	比重
頭	純金 (Au, K24)	19.32
胸と腕	銀 (Ag)	10.50
腹	青銅 (Cu+Sn)	8.96
腿	鉄 (Fe)	7.87
足と足指	鉄と陶土(粘土)の混合	---



見かけは巨大だが構造が脆く不安定 (図:http://www.wordexplain.com)

**パピロニア帝国 (BC625~539)**  
 (絶対専制君主国家 = 王が統治の全権能を所有)  
 ナボポラッサルによりメソポタミア南部のパピロニア(カルデア)を中心に建国(BC625)され、アケメネス朝ペルシアのキュロス2世によって征服(BC539)されるまで、地中海沿岸地域に至る広大な領土を支配した。

**メディア・ペルシア (メディアを含むペルシア帝国) (立憲国家、以下同) (BC539~331)**  
 BC539、ペルシアのキュロス王2世(在位: BC559~530)は、オビスの戦いで新パピロニア帝国最後の王ナボネドス(在位: BC556~539)率いるパピロニア帝国を滅ぼす。

**ギリシア王国 (BC331~168)**  
 BC331、ガウガメラを主戦場としてギリシア北部山岳地帯マケドニア王国のアレクサンドロス3世(大王、BC336即位20歳)とアケメネス朝ペルシアが衝突し、アレクサンドロスが大勝(ガウガメラの戦い)、アルベラの戦いでガウガメラの時と同じくダレイオス3世(在位: BC336~330、逃走中にバクトリア総督のベッソスに殺害される)は敗走、ペルシア制圧をした。

**ローマ帝国 (BC168~AD476)**  
 BC168、第三マケドニア戦争でローマの将軍アエミリウス・パウルスがマケドニア王ペルセウスを決定的に撃破した(ピドナの戦い)。すねが二本あるように、ローマ帝国はやがて東と西に分かれる。

**分裂諸国→利害や政策により成り立つ脆弱な連合組織**  
 AD476、ゲルマン人などの侵攻に晒された西ローマ帝国は、急速に統治能力を失い、ローマの傭兵隊長でゲルマン人のオドアケルが皇帝ロムルス・アウグストゥルスを退位させ、滅亡を迎えた。…他…

【参考】パピロニア帝国、メディア王国、ペルシア王国、ギリシア王国とする説もある。  
 【参考】古代ローマ帝国はAD395年に東西に分裂した後、西ローマ帝国はAD476年に、東ローマ帝国はAD1453年にオスマン帝国によって滅ぼされた。 ©H.Taniguchi 2019

なお見ていると、／王座が据えられ／「日の老いたる者（→永遠の神）」がそこに座した。その衣は雪のように白く／その白髪は清らかな羊の毛のようであった。その王座は燃える炎／その車輪（→神の臨在を表す）は燃える火／その前から火の川が流れ出ていた。幾千人が御前に仕え／幾万人が御前に立った（LB＝リビング・バイブル：何百万の御使いが神様に仕えており、何億という人が神様の前に立たされて、さばきを待っていました）。

裁き主は席に着き／巻物（→各人の善行と悪行が記録されている。出エジプト記 32：32、詩編 56：9、イザヤ書 65：6、マラキ書 3：16）が繰り広げられた（→神の裁きがなされる前に、天の記録が確かめられる）。

さて、その間にもこの角は尊大なことを語り続けていたが、ついにその獣は殺され、死体は破壊されて燃え盛る火に投げ込まれた。他の獣は権力を奪われた<sup>※6</sup>が、それぞれの定めの時まで生かしておかれた（LB：さらに、よく見ていると、あの残忍な第四の動物が殺され、体を焼かれてしまいました。全能の神様に対して尊大に振る舞い、その小さな角を誇っていたからです。残りの三頭の動物は、王国を召し上げられたものの、しばらくは生きのびることを許されました）。

夜の幻をなお見ていると、／見よ、「人の子」（→イエス・キリスト）のような者が天の雲に乗り／「日の老いたる者」の前に来て、そのもとに進み／権威、威光、王権を受けた。諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え／彼の支配はどこしえに続き／その統治は滅びることがない（LB：それで、どの国民もみな、この方に聞き従うようになりました。この方の権威は永遠で、決して終わることがありません。その国は滅びることがないのです）。

わたしダニエルは大いに憂い、頭に浮かんだこの幻に悩まされた。そこ（→王座のそば）に立っている人の一人（→幻を解釈するために遣わされた天使、または神に仕えていた「幾万人」の一人を指すと思われる→7：10。）に近づいてこれらのことの意味を尋ねると、彼はそれを説明し、解釈してくれた。

「これら四頭の大きな獣は、地上に起ころうとする四人の王である。しかし、いと高き者の聖者らが王権を受け、王国をとこしえに治めるであろう（LB：いと高き神（エル・エルヨン）の国民が、代々限りなく世界を治めるようになる）。」

更にわたしは、第四の獣について知りたいと思った。

これは他の獣と異なって、非常に恐ろしく、鉄の歯と青銅のつめをもち、食らい、かみ砕き、残りを足で踏みじったものである。その頭には十本の角<sup>※7</sup>（①フランク（フランス）、②ランゴバルド（ロンバルド）（イタリアの一部）、③ブルグント（スイス）、④スエヴィ（ポルトガル）、⑤ヴァンダル（北アフリカ）、⑥西ゴート（スペイン）、⑦アングロ・サクソン（イギリス）、⑧東ゴート（イタリア）、⑨アレマン（ドイツ）、⑩ヘルリー（イタリアの一部））があり、更に一本の角<sup>※5</sup>が生え出たので、十本の角のうち三本が抜け落ちた。その角には目があり、また、口もあって尊大なことを語った。これは、他の角よりも大きく見えた。見ていると、この角は聖者らと闘って勝ったが、やがて、「日の老いたる者」が進み出て裁きを行い、いと高き者の聖者らが勝ち、時が来て王権を受けたのである（LB：しかし、その勝利も、永遠の神様が来て法廷を開き、神様の国民の正しさを立証して、彼らに全世界を治める権威をお与えになるまでのことでした）。

さて、その（→王座のそばに立っている）人はこう言った。

「第四の獣は地上に興る第四の国（LB：〔一般にはローマ帝国〕）／これはすべての国に異なり／全地を食らい尽くし、踏みにじり、打ち砕く。十の角はこの国に立つ十人の王／そのあとにもう一人の王が立つ。彼は十人の王と異なり、三人の王を倒す（LB：この王は十人の王よりも残忍で、その中の三人の王を打ち倒してしまう）。彼はいと高き方に敵対して語り／いと高き方の聖者らを悩ます。彼は時と法を変えようとたくらむ。聖者らは彼の手へ渡され／一時期、二時期、半時期<sup>※8</sup>がたつ（LB：神様の国民も、三年半の間、この王の手中にあって、どうすることもできない）。

やがて裁きの座が開かれ／彼はその権威を奪われ／滅ぼされ、絶やされて終わる（LB：だが、神様が来て、正義の法廷を開き、この残忍な王からすべての主権を取り去り、完全に滅ぼし尽くす）。天下の全王国の王権、権威、支配の力は／いと高き方の聖なる民に与えられ／その国はどこしえに続き／支配者はすべて、彼らに仕え、彼らに従う。」

ここでその言葉は終わった（LB：夢はそこで終わりました）。

（目を覚ますと）わたしダニエルは大層恐れ悩み、顔色も変わるほどであった。

しかし、わたしはその言葉を心に留めた（夢で見たことは、だれにも話しませんでした）。

（ダニエル書 7：9～28）

⑧ダニエル書の2章4節から7章28節までは、「アラム語」で記されている。



**【参考】 アンティオコス 4 世エピファネス**

出生：BC215?、死去：BC163。BC2 世紀のセレウコス朝シリアの王（在位：BC175～163）。

プトレマイオス朝（グレコ・マケドニア人を中核とした古代エジプトの王朝）を圧倒したことでユダヤを支配下に治めたが、やがてマカバイ戦争を引き起こすことになった。

アンティオコス 3 世の子としてセレウコス 4 世フィロパトルの弟として生まれたアンティオコス 4 世はもともとミトラダテスという名前であったが、即位後（あるいは兄アンティオコスの死後）アンティオコス 4 世という名前を持ったとされる。アンティオコス 4 世はセレウコス 4 世の死後権力の座についた。

父アンティオコス 3 世が BC188 年にローマに敗れ、彼は人質としてローマに送られ、BC176 年兄セレウコス 4 世が人質をその子デメトリオス（後の 1 世）に代え、解放後はアテネに滞在した。これが彼をギリシア・ローマ文化の心酔者にしたが、シリア王となった彼はこの文化を自国ばかりかユダヤにも導入し、ヘレニズム化を推進した。

BC167 年には、彼はユダヤ人に対して徹底した宗教弾圧を開始した。彼はユダヤにギリシアの神の像を建て、ユダヤの伝統的な宗教行事を禁止し、従わない者たちを処刑した。これはイスラエル・ユダヤ民族がそれまでの歴史で体験した最大の宗教迫害だった。

こうした中でハスモン家に属するマタティアが、その一族とともに荒野に逃れて徹底抗戦を開始した。これがマカバイの乱で、やがてユダヤの独立へと向かうのである。

**アンティオコス4世**  
 Αντιόχος Δ' Επιφανής



アンティオコス4世エピファネスの肖像のコイン

**在位** 紀元前175年 - 紀元前163年

**出生** 紀元前215年?

**死去** 紀元前163年

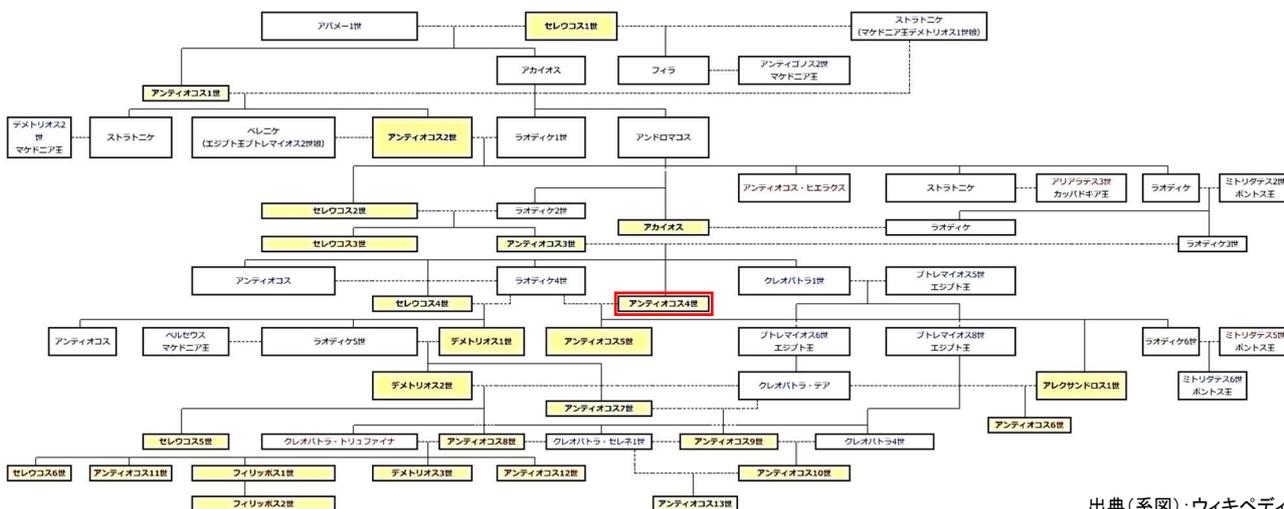
**配偶者** ラオディケ4世 (全血姉妹)

**子女** アンティオコス5世  
 アレクサンドロス1世  
 ラオディケ6世 (ポントス王ミトリダテス5世紀)

**王朝** セレウコス朝

**父親** アンティオコス3世

**母親** ラオディケ3世 (Laodice III)



出典(系図): ウィキペディア